
蒼神外伝；統一神と百年の惨劇の先

肥後魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼神外伝・統一神と百年の惨劇の先

【Zコード】

Z9149Z

【作者名】

肥後魚

【あらすじ】

「蒼神の軌跡」の外伝です。主人公は統一神『ライボルト』、ヒロインは羽入です！・・・昭和58年、6月の度重なる惨劇が始まると約50年前・・・「オヤシロさま」こと羽入は、自分の孫を見守りながらも神としての戦いに明け暮れていた。が、神となつた身でも種族の宿命からは逃れられず、ついに体が縮んでしまう。宿命に押しつぶされそうになつた彼女の前に、神の『英雄』が姿を表す。

基本能力がチートです。後、羽入がバトル強いです。ライボルトの正体は作中で明らかになります。

この作品の更新ペースは非常に遅いです（一ヶ月に一話程度くらいが目安）。ご了承ください・・・。

プロローグと、キッカケ（前書き）

蒼神の外伝ものです。ひぐらしが元ですが、結構いじくっています。
・・。

プロローグと、キッカケ

。 。

「いよいよだな。」

「ええ、いよいよです。」

そこは空間…。藍色に染められし中にいくつかの光がちりばめられている、地も空も無き空間…。そこに存在するは青年と少女。否、「見た目は」という言葉を先に言つておるべきだった。

存在せしは『神』。つまりは人外であり、それを超越する存在。それが二人、ここにいる。

「にしても、長かったろ？ 何せ千年つていう時間を歩んだからなあ。」

「…なんかあなたに言われても説得力がないのです。だってあなたは…」

「約一億年もの間存在し続けたから、だろ？」

「そうなのです。それに比べれば、僕は…。」

「そういうことは気にしないことだ。時間の感じ方は個人で違う…。

お前にとつての千年は、俺にとっての一億年とそう変わりはないのかも知れないしな。」

「あうあう～、それはちょっと無理があるのですよ…。」

「ん、そつか？」

「そうなのです！」

「この二人…、実は既に150年の付き合いでだ。そんな時を共に過ごしたないうまのよしうな会話をしていくもおかしくはないだらう。」

「さて、と…。なり、行つてきなよ。『運命を打ち破りに』。」

「はいなのです…。」

「そして、『2つの顔の役割』をまつといふため。」

「…ええ、 そののです。だから…、」

巫女服を着し、紫色の髪の少女は、隣にいる金髪オッドアイの青年に告げた。

「僕は、『オヤシロさま』として…、『古手羽入』として、繰り返されてきた惨劇を『仲間』と共に、打ち破るのですっ！」

彼女の最後の戦いは、幕をあける……。

150年前・某異世界

「ひいいいつ！－！－！」化け物だあああああ－！－！－！」

ズザツ
ザシユツ

決して聞いていて気持ちの良くない悲鳴が、一帯に木靈する。その後には何かを切り裂く音が続いた。

「許してくれつ！！！ 許してくれえええええ！！！」

「黙れ」

「 めめやああああああ…………（ドサツ）」

血塗られた刀を腕に持つ、巫女服の少女……とこには大きすぎ
るか・・・・・?

「はあ、はあ・・・。」

その顔は『憤怒』の一言で表せるもの。

「・・まだ、殺るか・・・?（ギリラシ）」

『ひつ、ひいいいいいい！――――――――――』

周りにいた者達は蜘蛛の子を散らすように逃げおおせた。それを見た『彼女』は刀を地面に突き刺す。その刀身は血によつて真っ赤になっていた。

「・・・また、化け物呼ばわり、か・・・。」

そう言つて、頭を触る。　いや、正確には頭に生えている角を
触る。

「人には化け物と呼ばれ・・・、ここに居る『神』共も同じことを
言つ・・・。我はやはり何処へ行つても・・・。」

表情は憤怒から悲壮に変わる。この角のせいで……、そう思つて思わず折つてしまおうかと行動に移りかけるが、そんなことをすれば命がない……。

「私は……、どこでも……。僕は……。」

エ？ ボク……？

「いや違う！！ 我は……。既に始まっているのです……んなつ！！？」

何故か、言葉遣いが幼児退行している。これは、彼女等の種族の宿命……。体が老化しない代わりに、精神が幼児退行し、消滅……。つまりは死にいたる……。

「ぐつ！！！？（ガクガクッ）！？」

突然、足に力が入らなくなつた。……理由がどうであれ、退化が急速に進んだんだろう。

「・・・。あう～・・・、僕はまた、幼くなってしまったのですね・・・。

見れば、背はやや小さくなつてしまつた、だらうか・・? 窮屈そつだつた巫女服は一度よくなつていた。・・・胸は、そんなに小さくなつていないようだ・・・。

「・・・ついで、ここまで幼くなつてしまつたのです・・・。」

彼女の名は、「羽入」・・・。約900年前に愛した男がつけてくれた名前・・・。が、それから数年して、彼女はもう一つの名を得た。

「でも・・・。僕はこれでも神・・・『オヤシロさま』なのです。」

オヤシロさま
。

彼女の、『神』としての名前・・・。神として生きた年月は100年。神々の中ではとても短いほうだ。が、彼女は名高き者であり、恐れられる者・・・。故に・・・、

「僕は・・・、『独り』なのです・・・。」

「なら、俺と『知り合い』になるか?」

「へつ?」

隣に佇むは、神々の「英雄」

プロローグと、キッカケ（後書き）

ライボルト（以後・ライ）

「さてさて、記念すべき一話目だな。」

羽入

「あうあう～、短かつたですね。」

ライ

「仕方ないさ。まだ一話目だろ？ これから膨らんでいくよ。」

羽入

「それにして、まさか僕が主人公になるとは思わなかつたのです。

」

肥後魚

「僕がひぐらしで一番好きなキャラだからね。まあ物凄く普通なりゆうでしょ？」

ライ

「ベタだな。」

羽入

「ベタなのです。」

肥後魚

「というわけで、これからもよろしくお願ひしますーーー！」

ライ

「あつ、スルーしゃがつた。」

羽入

「現実から逃避してやがるのです。」

肥後魚

「言い方が直球過ぎだつ！――！」

その者、率いる存在なりて（前書き）

抗えぬ運命にある羽入・・・。そんな彼女の前に、一人の神が現れた。

その者、率いる存在なりて

「誰なのですか？」

普通に聞いた。といふか、それくらにしか聞くことがないのも事実。いや、最初に聞くことといえば、まあこんなもんだらう。

「ただの神や。」

非常に困惑する返答が帰ってきた。

「あうあう～、それじゃ答えになつていないので。」

「やうか？」

「あうう・・・、非常に困るのです・・・。」

「『めん』めん（笑）ちよつとからかに過ぎたな。」

金髪蒼眼の青年のなりをした彼は、笑いながらさりげなく口を閉じた。

「俺の名は『統一神・ライボルト』。ここいら周辺の銀河系を束ねてる。」

「あう！…！…？！、（%“#”\$“\$”%%\$‘%&%“-!-!-?！」

羽入は仰天した。神であるもの、この名を知らぬものはいないから

だ。

「まさかっ、何十億といいる神の中でも僅かに24人しか存在しない、かの『絶神』序列第11位のライボルト様でいらっしゃいますのですか！？！？」

平伏してしまった。が、これが当たり前の反応。絶神……24人しか存在しない、神々の中でも無敵の実力・権力を持つ『決して逆らってはならない者』……ここにいるライボルトはその中でも序列第11位。が、その実力は上位の絶神にも劣らないと言われている。彼は既に、一億年という果てしない時を存在し続けた実力者。が、

「そんなにかしこまらないでくれよ。俺、そういうの苦手だから

「

「で、でも……」

「口調もいつもどおりで結構。絶神も何も関係なしだ。どう？ 俺と知り合いにならない？」

彼に、自身が途方もない存在という自覚は無い。いや、あるのだろうが、堅いことが生まれつき……、存在したときから苦手らしい……。

「全く、お前はもう少し自覚を持つたらどうだ？ それではお前と話す格下の神々が可哀想でならない。」

（）

（））

同じ『絶神』・アポロン』（序列13位）にそう言われたことがある。

「ええと、その……。」

「ははっ、樂にしてくれ。別に深い意味はない。ただ、知り合いになろうって言ったんだ。君、一人で淋しそうだつたから。」

「そ、それは……。」

否定はしない。これまで、神となつてからは常に孤独だった。とある世界に遺してきた子孫たちをこゝそりと見守つてやつてる以外は、本当に孤独だった。

「でも、僕は……」

「大丈夫、氣を静めな。俺は一度知り合いになつた奴は見捨てない。そして、友人になつたら絶対に裏切らない。だから、安心してくれ。・・。」

「あう・・（ポタッ）・・ひぐつ、う・・・・、うわああああん
！――――！」

羽入は本当に久しぶりに泣いた。初めて出会った、遙か格上の神・。しかし、その温もりにはどいか懐かしさを感じずにはいられなかつた。

暫くの後

「『』めんなさいなのです・・・。」

「気にしないで。」

結局、ライボルトに抱きついて泣き続けてしまつた。気づけば、どれだけの日々がたつていたのだろうか・・・。

「そういえば、名前をまだ聞いていなかつたね。」

「そうだったのです。我が名は羽入、またの名を『オヤシロ』といいます。」

「普段は様付け、でしょ?」

「はいなのです。でもなんで知ってるんですか？」

「俺みたいな古い連中は大体の神々の詳細データは把握してるよ。あつ、生前のこととかはプライバシーの関係上知らないから。」

「正直ホッとしたのです・・・。」

あまり見られたくない過去である。

「で、わざわざ遠くから見てたときに体が縮んだけど、あれは一体？」

「・・・宿命なのです。神となつても、僕の体を蝕む僕の一族の宿命・
・・。」

「まさか、かの世界の『流浪の民』の血族か・・・？」

「プライバシーは何処へやら、ですね・・・。」

「これは生前に異世界めぐりをしたときの記憶だ。俺も元は人間だったからな。」

「そうなのですか・・・。そう、僕はその民の一員。世界から世界へと流れ着き、そこに住もうとした。でも、既にそこには人間が暮らしていた。僕たちは共存を申し出ましたが、彼らは拒絶しました。拒絶は争いを生み、血まみれの戦争へと発展しました。僕はそれを止めたかったのです。だから、人に姿を変えて人間たちの前に出ました。」

「ほう、それは勇気があるな。が、表情を伺うに、問題があつたんだな？」

「そうなのです。人間の女性になつたはいいものの、何故か角だけは残りました。」

「「」の角のことかい？」

「ええ・・・。当然、忌み嫌われました。人間の村の神社の神主に頼んで戦争をやめさせようともしましたが、断られました。・・・僕は仕方なく戦いました。流浪の民と人間の戦争は、次第に人間同士の殺し合いになつっていました。そんなとき、僕は一人の赤ん坊を救いました。」

「よく、救つたな。自分たちを忌み嫌う人間の赤ん坊を。」

「その子には罪はないのです。・・・それから十数年後、僕は青年と出会いました。後になつて知ったのですが、その青年は僕が救つた赤ん坊だったのです。しかも、僕を拒絶した神社・・・、古手神社の神主の跡継ぎでした。そのうち、僕は彼に魅かれました。そして結ばれ、娘を得ました。ところが、とある出来事をきっかけに、彼は死んでしまいました。そして、僕は娘以外の人間に感知できない存在へとなつてしまつたのです。」

「つまりは靈みたいなものかい？」

「そういうことになるのです。・・・そして、娘は成長しました。古手神社の神主として、立派にやつてくれていました。そんなとき、私は娘に特別な薬を与えました。前々から奇病で苦しんでいた村の子供に飲ませてやるよう而言いました。娘・・・、桜花は言つとお

りに飲ませ、その子供はたちまち良くなりました。」

「一件落着・・・、そうは言えないんだろ?」

「・・・人間は欲深きもの。そして、富を我が物としようとするあまりにも醜い心を持つていて。村人の一部はその薬を欲しいがために、桜花を問い合わせました。もちろん、私が持っているなんて言えるはずもなく・・・、村人は桜花を・・・拷問しました。」

ビキビキッ

「蛆虫にも劣る下劣な輩共め・・・(ギリッ)」

ライボルトは怒りを隠さなかつた。が、彼が本氣で怒つてしまえばこの世界など一瞬で消えてしまつ。そういう存在なのだ。

「落ち着いてくださいなのです・・・。」

「す、すまない・・・。」

思い直す。一番つらいのは話している羽入ではないか。

「僕はぶち切れました。居能の力を振るい、村人たちを殺しました。理性を取り戻したときにはもう遅く、そこは血の海となっていました。残った村人たちは恐れました。そして、化け物となつた僕を討ち取る救世主を欲しましたのです。・・・それが、桜花です。」

「・・・」

「あの子は反対しました。しかし、僕の覚悟はできていました。それに、僕はもう人間に絶望しました。あんな醜い世界になど、存在したくはない・・・。そう思いました。そして・・・、」

「実の娘である桜花ちゃんにより、君は消滅・・・。その後、神となつて再び降り立つた、か・・・。」

「その通りです・・・。その後、桜花は村人に碇を作りました。『この村から出てはいけない』なんてものを初めとして、村人たちの心にここに存在せし神、つまりは僕の信仰を植えつけました。そこで、『オヤシロさま』という呼称が生まれました。それからというもの、僕は影から桜花の子孫を見守り続けています。干渉はしません。観察するだけです。」

「その最中にも、神の世界で戦に明け暮れたんだな。」

「そうです。二百年くらいたつ頃でしょうか・・・? 気づきました。神になつても、体の退化は進行していましたんです。」

「流浪の民は、確かに体が老化することはないと聞く。代わりに、精神と身体が徐々に幼児退行して結果的に死にいたるらしいな。」

「その通りです。だから、僕の体もこのよつこ子供同然です。」

「・・・（ジ―――ッ）」

「な、なんですか？」

ムードツ

「あう！――！？」

「胸は、体に反して結構な形を・・・」（パンシッ）（ドゴオチ・
ー）（ぐふおおおおー！――！――！？）

見事に右ストレートがヒート。

「ぐ、変態なのですっ！――！」

「（）めん、つ（）手が・・・。」

「つ（）じやないのです～！――！」

左フックを貰つたのは当たり前の話・・・。

羽入は顔を真っ赤にしている。胸を触られたら当然ではある。

宇宙・某所

ズズウ――――――――――――――!

一つの星が、碎けた。それを興味なさそうに見るのは、最近話題の神・・・。

「さて、仕事は終わったわね。」

彼女の仕事・・・。それは、星を破壊すること・・・。

「今回の任務はただそれだけ。でしょ？ オリサム。」

「まあな。さて、帰るつぜ。ここに長居する理由はない。」

「それもそうね。」

少年と少女、一人が立ち去るのになると、

「おのれええええ―――――― よくも私の星をつ――――！」

目の前には、巨大な戦艦・・・。主砲を構え、通信の声が怒鳴る。

「死ねつ！！ 化け物どもめえええ！！！」

主砲から膨大なエネルギーが放たれる。それは一直線に一人に向かうが、

「恒星の灯火よ、焼け・・・。プロミネンス」

ボオオオオオオオオオオ！――――――！

エネルギー砲は、跡形もなく突如現れた猛火に焼き尽くされる。

「なつ、なつ・・・・・！――！」

戦艦の艦長は驚くが、少女は気にしない。

「うるさいのよ。・・・消えなさい。・・・第九星雲、リゲル・・・

。

声と同時に、恒星が一つ、飛んできた。

「う、うわああああああー！――！」

ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド、

戦艦など、跡形もなく溶けた・・・。少女は結果を見ない。分かつているからだ。

「とんだ無駄な時間だつたな。」

「全くよ。それで、お兄ちゃんのところへ帰るわよ。」

「やうだな、ライさんには報告をしなくては・・・。」

二人は、消えた・・・。

場所は戻る

ようやく羽入が落ち着いた頃、ライボルトは改めて知り合いになりとつと言つてきた。胸を触られたのには驚いたが、非常に一緒にいて安心するような感じであつたため、彼女は快諾した。

「じゃ、早速俺の統治する銀河系に来ないか?」

「いいのですか？」

「まつ、安心してくれ。そこは宇宙でも一番つけてるから安全だから。

」

「あうあう、それじゃあお言葉に甘えるのです。」

こうして、二人はライボルトが泊める銀河系に向かうのであった。

その者、率いる存在なりて（後書き）

肥後魚

「どうです？ 全く展開が読めなくて文章が無茶苦茶でしょ？」

ライ

「自分で書いといて言うなよ。」

羽入

「なのです。」

肥後魚

「だつてなあ～」

ライ

「まあいい。で、なんか新しいキャラが登場したな。」

少女？

「私のことかしら？」

ライ

「まつ、俺は知ってるんだけど・・・。」

羽入

「あうあう～、一体誰なのですか？」

少女？

「それは次回判るわよ。」

肥後魚

「だから、読者の世さん……」

ライ

「どうせ次回も必ず読んでください……って言つんだろ?」

肥後魚

「ライボルト、君は先を読みすぎてる……。こうなつたら、君の
ものすごい秘密を」

ライ

「バラしたら死刑ね。」

肥後魚

「この卑怯者。」

ライ

「ビノがだよつ!？」

羽入

「ではでは、次回も出来れば見てくださいなのですが……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9149n/>

蒼神外伝；統一神と百年の惨劇の先

2010年11月11日09時53分発行